

あるあらぬものおくにたゞ想像の人

(皇后)

ありがたき人

光明后皇

小さかしき人

牧のかた
(方)

いたはしき人

女三宮
おんなさんのみや

心地よしと思はるゝ人

鶴か岡二舞ひし静
つる おか ま しずか

やさしくたゞ美しき

紫のうへ
むらさきのうへ

哀れに美しき

往生院の横ふえ
おうじょういん よこふえ

なつかしき人

うつ蟬
せみ

涙こぼるゝ人

住吉にミえし一の姫君
すみやし いち ひめぎみ

また世にあらぬ天才

一葉さん
いちようさん

あつけなき人

常盤のまへ
とぎわ

あちなき人

蓮月尼
れんげつに

つまらぬ人

平政子
たいぢ まねこ

いま一いきの人

小町
こまち

美しからず思はるゝ

馬の内侍
うま ないじ

女傑と思はるゝ

老女之村岡
らうにょのむらおか

なりてミたき

對調護のたへ子
ついでくろ

話してミたき

風流絲の龍さん
ふうりゅうしそ りゅうさん

(謡)

志慮ふかそうな

宇治の大君
うじのおおきみ

好ましからぬ

はつ野
の

《各人名の詳細》

光明皇后…七〇一年（大宝元）～七六〇年（天平宝字四）六月七日

別名 あすかへ 安宿 こうみやうし 光明子

藤原不比等の三女で、母はあがたいぬかいのみちよ 皇犬養三千代。聖武天皇の皇后。

七一六年（靈龜二年）、皇太子首皇子の妃となる。

七二四年（神龜元）聖武天皇夫人。七二九年（天平元）皇后となり、臣下（皇族以外）皇后の初例。

臣下皇后擁立をきっかけに長屋王の変が起こり、兄のふじわらのむち 藤原武智

まる 麻呂・ふさむね 房前・うまかい 宇合・まる 麻呂が長屋王を政治から失脚させ、死に追いやる。

皇后は生涯、高い教養でよく天皇を補佐し、天平文化、特に天平仏教の発展と隆盛に寄与した。

また、父不比等から相続した旧宅に施薬院・悲田院を置いて、社会事業を起こし、皇后宮下で写経所を設置した。

牧の方 ……生没年不詳。

牧宗親の娘で、北条時政の後妻。

娘婿である京都守護平賀朝雅を愛し、朝雅と畠山重忠の子重保とが衝突した時、時政に中傷し、一二〇五年（元久二）六月畠山父子を討たせる。続いて、朝雅を鎌倉幕府の將軍に立てる陰謀を企てたが、源（北条）政子に知られ、七月に北条義時に朝雅は殺され、牧の方は、時政とともに伊豆北条の地へ幽閉された。

女三宮 ……『源氏物語』に出てくる架空の人物。

父は朱雀院で、第三皇女。そして、母は光源氏が溺愛した藤壺。

父に溺愛され、光源氏に嫁ぐが、源氏は頼りなく幼いだけの人柄に失望する。

一三歳で準太上天皇である源氏の君に嫁ぐ。内大臣（もと頭中将）の子・柏木と密通により、不義の子・薫を出産。その後、出家してしまう。

静御前 ……生没年不詳。平安後期・鎌倉前期の白拍子。

讃岐国大川郡小磯生まれで、母は磯禅師。源義経の側女であった。

義経は兄頼朝と不和になり、一一八五年（文治元）一一月一二日、

義経追討の院宣が下る。その後、静は平泉の奥州藤原氏を頼る義

経には同行せず、京都へと戻る途中で捕らえられ、後に鎌倉へと送られた。

一一八六年（文治二）四月八日、頼朝夫妻の求めで鶴岡八幡宮にて義経恋慕の舞を踊った事は非常に有名である。

紫の上 ……享年 四三歳

別名 紫の君。対の上。春の上。

『源氏物語』に出てくる架空の人物。

父は、藤壺の兄にあたる兵部卿宮（後の式部卿宮）、母は按察使大納言の娘。藤壺の姪。

母が亡くなった後、祖母の尼君のもとで育てられる。幼い頃、光源氏が北山を訪れた際に愛しい藤壺の面影をもっていることから見初められる。誘拐同然に二条院に連れてこられ、そのまま妻となる。六條院南東の町（春の御殿）の女主人。葵の上が死後、女三宮降嫁までは源氏の正妻であった。子どもはなし。

光源氏四〇歳の頃、朱雀院の姫・女三の宮（一三歳）を妻に迎えてから病につき、光源氏へ出家を願うが、許されないまま四三歳で病死。

横笛 ……生没年不詳。

高倉天皇の中宮建礼門院の雑仕。『源平盛衰記』によると、初め神崎の遊女で今様・朗詠・琴・琵琶・歌道に優れ、平清盛に中宮として勧められ、平重盛に「横笛」と名づけられたと伝えられている。

また、重盛の家臣斉藤滝口時頼が横笛の美しさに心惹かれたが、父に戒められ、時頼は一八歳で出家した。横笛はこれを聞き、時頼に会いに行くが、願い叶わず、大堰川に身を投げて死んだ。時に一七歳であった。

空蝉 ……『源氏物語』に出てくる架空の人物。

伊予の守の後妻。中流階級の心惹かれる女性である。光源氏の君と一度だけ契るが、その後はずっと逃げ続け、夫の任地へ下る。

一の姫君 ……『源氏物語』に出てくる架空の人物。

父は光源氏、母は明石の君。母・明石の君の位が低かったために、源氏の正妻であった紫の上の養女となる。実母と離れ、住吉へ訪ねた事がある。実母との再会は、天皇に嫁ぐ際である。匂宮を産む。

樋口一葉 ……一八七二年（明治五）三月二五日～一八九六年（明治二九）一月

二三日。

東京生まれで、明治期の小説家。樋口則義（警視庁巡查）とたきの二女。

父の転任に伴い、三回転居する。一八八三年（明治一六）の一歳には、下谷の私立青梅学校高等科第四級を首席で卒業する。

旧三多摩自由黨員の渋谷三郎と婚約していたが、父が多額の負債を抱えたまま亡くなった事がわかり、婚約を解消される。

一八九一年（明治二四）、半井桃水に師事し、翌年桃水主宰の『武蔵野』で処女作『闇桜』を発表するが、桃水との関係がこじれ、関係を断つ。

一八九二年（明治二五）、「うもれ木」を発表し、これが出世作となる。一八九三年（明治二六）には、「雪の日」「琴の音」、一八九四年（明治二七）には、「大つごもり」「たけくらべ」「ごりえ」「十三夜」「わかれ道」を発表した。一八九五年（明治二八）『太陽』に「ゆく雲」を発表してからは、著名となり、『文芸倶楽部』に「たけくらべ」が一括掲載されると、翌年森鷗外らに絶賛される。

文名が一挙に高まった矢先に肺結核のため、二四歳という若さでこの世を去る。

ときわこせん
常盤御前……生没年不詳。

別称 常華御前 常磐御前

梅津源左衛門と桂宰相の娘で、源義朝の側室・源義経の母。

九条院（近衛天皇の皇后藤原呈子）の雑仕。二三歳の時に義朝が平治の乱で敗れ、三児の助命と母の釈放が危ぶまれたが、六波羅に出頭し、願い許された。

その後、平清盛の子を生んだといわれ、さらにその後は大蔵卿一条長成の妻となり、能成の母となった。

おあたがきれんげつ
太田垣蓮月……一七九一年（寛政三）一月八日～一八七五年（明治八）二月一

〇日。

別称 誠のぶ 蓮月尼

京都生まれ。津藩主藤堂家の分家藤堂の庶子で、知恩院の寺侍大

田垣光古てるひなの養女。

和歌・武技・裁縫・囲碁・茶の湯・生花等の七芸に富む。

一八一九年（文政二）、二九歳の時に彦根藩士古川重二郎を婿養子とした。

勤王の志が厚く、梅田雲浜・梁川星巖・井出曙覧・野村望東尼・税所敦子ら文雅の友・勤王の士との交遊もあり、若き日の富岡鉄斎などにも世話となった。

平政子たいらのまぢ

…生没年不詳。

別称 若狭局

平正盛の娘か。丹後局（高階栄子）の母。建春門院平滋子のもとで乳母を務める。

一一六八年（仁安三）～一一八五年（文治元）にかけての高倉・安德期に権勢の女房として活躍する。

小野小町おののこまち

…生没年不詳。

平安前期の歌人で、出羽郡小野良真よしざね（良実とも）の娘、小野篁たかむらの娘（孫とも）等の諸説がある。

最盛期とされるのは八三四～八七七年（承和・貞観）頃で、仁明・文徳両天皇の後宮に仕え、清和天皇の八六六年（貞観八）頃まで仕えていたとされる。

エジプトのクレオパトラ・中国の楊貴妃と並び、世界三大美女と伝えられる。また、歌才にも恵まれ、『古今集』においては、在原業平・大伴黒主・喜撰法師・僧正遍昭・文屋康秀と並び、六歌仙と称された。

馬内侍うまのないし

…生没年不詳。

父は右馬権頭源時明で、養父と伝えられる。父の官職から「馬」と呼ばれた。

はじめは、村上天皇の女御徽子に仕え、その後、円融天皇の中宮に仕えた。生涯のほとんどを宮仕えして過ごし、多彩な恋愛に生きた。『馬内侍集』の中にある歌の九割は恋愛歌で、同時代からも「たぐいなき恋する人」と言われた。

村岡局むらおかのかしほね

…一七八六年（天明六）～一八七三（明治六）八月二三日。

別称 梅子 矩子

京都嵯峨生まれで、大覚寺門跡家臣津崎左京の娘・同門跡諸大夫津崎元矩の妹。

一三歳で近衛家に仕え、後に老女となり、村岡と称した。一八六〇年（安政五）に起こった安政の大獄で捕われ、押込み三日の刑に処せられた。評定所での村岡は、近衛家の立場と自分

の信義を守り通し、恐れる気配もなかった。一八六三年（文久三）、再び幕府の糾問にあったが、釈放された。

妙たえ

…生没年不詳。

平安後期の摂津国江口の遊女。

西行との贈答歌が『新古今集』にある。

坂本龍さかもとりょう

…一八四一年（天保一二）～一九〇六年（明治三九）一月二五日

京都の医家榎崎将作の長女で、坂本竜馬の妻。

佐々木高行はお龍について「有名なる美人のことなれども賢美人なるや否やは知らず、善悪ともなしかねるように思はれたり」と評価している。

夫の死後、お龍の性格と行動は周囲に容認されず、神奈川県横須賀の郊外でわびしく六六歳で亡くなった。

宇治の大君うじのおおきみ…『源氏物語』

に出てくる架空の人物。

光源氏の異母弟・八の宮の長女。

柏木と女三宮の子である薫に慕われる。妹の中君に薫を薦める。しかし、中君は、匂宮と契り、思い悩んだ大君は亡くなる。

はつ野…

お初。生没年不詳。元禄十六年（一七〇三）四月七日

大坂曾根崎天満屋の遊女。大坂内本町の醤油屋平野屋の手代徳兵衛と情死した。

お初は全盛の遊女で、京都島原から流れてきた。平野屋は大坂一番の醤油屋で、徳兵衛は主人忠右衛門の甥。身請け、縁談の話があり、お初は二一歳。徳兵衛は二五歳で情死。近松門左衛門が浄瑠璃に脚色。